藤十郎の恋（菊池寛）

一

元禄と云う年号が、何時の間にか十余りを重ねたある年の二月の末である。

都では、春の匂いが凡ての物を包んでいた。ついこの間までは、頂上の処だけは、斑に消え残っていた叡山の雪が、春の柔い光の下に解けてしまって、跡には薄紫を帯びた黄色の山肌が、くっきりと大空に浮んでいる。その空の色までが、冬の間に腐ったような灰色を、洗い流して日一日緑に冴えて行った。

鴨の河原には、丸葉柳が芽ぐんでいた。その礫の間には、自然咲の菫や、蓮華が各自の小さい春を領していた。河水は、日増に水量を加えて、軽い藍色の水が、処々の川瀬にせかれて、淙々の響を揚げた。

黒木を売る大原女の暢びやかな声までが春らしい心を唆った。江戸へ下る西国大名の行列が、毎日のように都の街々を過ぎた。彼等は三条の旅宿に二三日の逗留をして、都の春を十分に楽しむと、また大鳥毛の槍を物々しげに振立てて、三条大橋の橋板を、踏み轟かしながら、遥な東路へと下るのであった。

東国から、九州四国から、また越路の端からも、本山参りの善男善女の群が、ぞろぞろと都をさして続いた。そして彼等も春の都の渦巻の中に、幾日かを過すのであった。

その裡に、花が咲いたと云う消息が、都の人々の心を騒がし始めた。祇園清水東山一帯の花が先ず開く、嵯峨や北山の花がこれに続く。こうして都の春は、愈々爛熟の色を為すのであった。

が、その年の都の人達の心を、一番烈しく狂わせていたのは、四条中島都万太夫座の坂田藤十郎と山下半左衛門座の中村七三郎との、去年から持越しの競争であった。

三ヶ津の総芸頭とまで、讃えられた坂田藤十郎は傾城買の上手として、やつしの名人としては天下無敵の名を擅にしていた。が、去年霜月、半左衛門の顔見世狂言に、東から上った少長中村七三郎は、江戸歌舞伎の統領として、藤十郎と同じくやつしの名人であった。二人は同じやつしの名人として、江戸と京との歌舞伎の為にも、烈しく相争わねばならぬ宿縁を、持っているのであった。

京の歌舞伎の役者達は、中村七三郎の都上りを聴いて、皆異常な緊張を示した。が、その人達の期待や恐怖を裏切って七三郎の顔見世狂言は、意外な不評であった。見物は口々に、

「江戸の名人じゃ、と云う程に、何ぞ珍らしい芸でもするのかと思っていたに、都の藤十郎には及び付かぬ腕じゃ」と罵った。七三郎を譏しる者は、ただ素人の見物だけではなかった。彼の舞台を見た役者達までも、

「江戸の少長は、評判倒れの御仁じゃ、尤も江戸と京とでは評判の目安も違うほどに江戸の名人は、京の上手にも及ばぬものじゃ。所詮物真似狂言は都のものと極わまった」と、勝誇るように云い振れた。が、七三郎を譏しる噂が、藤十郎の耳に入ると、彼は眉を顰めながら、

「われらの見るところは、また別じゃ。少長どのは、まことに至芸のお人じゃ。われらには、怖ろしい大敵じゃ」と、只一人世評を斥けたのであった。

二

果して藤十郎の評価は、狂っていなかった。顔見世狂言にひどい不評を招いた中村七三郎は、年が改まると初春の狂言に、『傾城浅間ヶ嶽』を出して、巴之丞の役に扮した。七三郎の巴之丞の評判は、すさまじいばかりであった。

藤十郎は、得意の夕霧伊左衛門を出して、これに対抗した。二人の名優が、舞台の上の競争は、都の人々の心を湧き立たせるに十分であった。が新しき物を追うのは、人心の常である。口性なき京童は、

「藤十郎どのの伊左衛門は、いかにも見事じゃ、が、われらは幾度見たか数えられぬ程じゃ。去年の弥生狂言も慥か伊左衛門じゃ。もう伊左衛門には堪能いたしておるわ。それに比ぶれば、七三郎どのの巴之丞は、都にて初ての狂言じゃ。京の濡事師とはまた違うて、やさしい裡にも、東男のきついところがあるのが、てんと堪らぬところじゃ」と口々に云い囃した。

動き易い都の人心は、十年讃嘆し続けた藤十郎の王座から、ともすれば離れ始めそうな気勢を示した。万太夫座の木戸よりも、半左衛門座の木戸の方へと、より沢山の群衆が、流れ始めていた。

春狂言の期日が尽きると、万太夫座は直ぐ千秋楽になったにも拘らず、半左衛門座は尚打ち続けた。二月に入っても、客足は少しも落ちなかった。二月が終りになって、愈々弥生狂言の季節が、近づいて来たのにも拘わらず、七三郎は尚巴之丞の役に扮して、都大路の人気を一杯に背負うていた。

「半左衛門座では、弥生狂言も『傾城浅間ヶ嶽』を打ち通すそうじゃが、かような例は、玉村千之丞河内通いの狂言に、百五十日打ち続けて以来、絶えて聞かぬ事じゃ。七三郎どのの人気は、前代未聞じゃ」と、巷の風説は、ただこの沙汰ばかりのようであった。

こうした噂が、かまびすしくなるにつれ、私に腕を拱いて考え始めたのは、坂田藤十郎であった。

三ヶ津総芸頭と云う美称を、長い間享受して来た藤十郎は、自分の芸に就ては、何等の不安もないと共に、十分な自信を持っていた。過ぐる未年に才牛市川団十郎が、日本随市川のかまびすしい名声を担うて、東からはるばると、都の早雲長吉座に上って来た時も、藤十郎の自信はビクともしなかった。『お江戸団十郎見しゃいな』と、江戸の人々が誇るこの珍客を見る為めに、都の人々が雪崩を為して、長吉座に押し寄せて行った時も、藤十郎は少しも騒がなかった。殊に、彼が初めて団十郎の舞台を見た時に、彼は心の中で窃に江戸の歌舞伎を軽蔑した。彼は、団十郎が一流編み出したと云う荒事を見て、何と云う粗野な興ざめた芸だろうと思って、彼の腹心の弟子の山下京右衛門が、

「太夫様、団十郎の芸をいかが思召さる、江戸自慢の荒事とやらをどう思召さる」と訊いた時、彼は慎ましやかな苦笑を洩しながら「実事の奥義の解せぬ人達のする事じゃ。また実事

の面白さの解せぬ人達の見る芝居じゃ」と、一言の下に貶し去った。が今度の七三郎に対しては、才牛をあしろうたようには行かなかった。

三

と、云って藤十郎は、妄に七三郎を恐れているのではない。もとより、団十郎の幼稚な児騙しにも似た荒事とは違うて、人間の真実な動作をさながらに、模している七三郎の芸を十分に尊敬もすれば、恐れもした。が、藤十郎は芸能と云う点からだけでは、自分が七三郎に微塵も劣らないばかりでなく、寧ろ右際勝りであることを十分に信じた。従って、今まで足り満ちていた藤十郎の心に不安な空虚と不快な動揺とを植え付けたのは、七三郎との対抗などと云う事よりも、もっと深いもっと本質的なある物であった。

彼は、二十の年から四十幾つと云う今まで、何の不安もなしに、濡事師に扮して来た。そして、藤十郎の傾城買と云えば、竜骨車にたよる里の童にさえも、聞えている。また京の三座見物達も藤十郎の傾城買の狂言と言えば、何時もながら惜し気もない喝采を送っていた。彼が、伊左衛門の紙衣姿になりさえすれば、見物はたわいもなく喝采した。少しでも客足が薄くなると、彼は定まって、伊左衛門に扮した。しかも、彼の伊左衛門役は、トラムプの切札か何かのように、多くの見物と喝采とを、藤十郎に保証するのであった。

が、彼は心の裡で、何時となしに、自分の芸に対する不安を感じていた。いつも、同じような役に扮して、舌たるい傾城を相手の台詞を云うことが、彼の心の中に、ぼんやりとした不快を起すことが度重なるようになっていた。が、彼は未だいいだろう、未だいいだろうと思いながら一日延ばしのように、自分の仕馴れた喝采を獲るに極った狂言から、脱け出そうと云う気を起さなかったのである。

こうした藤十郎の心に、怖ろしい警鐘は到頭伝えられたのだ。「また何時もながら伊左衛門か、藤十郎どのの紙衣姿は、もう幾度見たか、数えきれぬ程じゃ」と、云う巷の評判は、藤十郎に取っては致命的な言葉であった。彼が、怖れたのは七三郎と云う敵ではなかった。彼の大敵は、彼自身の芸が行き詰まっていることである。今までは、比較される物のない為に、彼の芸が行き詰まっている事が、無智な見物には分らなかったのである。彼は、七三郎の巴之丞を見た時に、傾城買の世界とは、丸きり違った新しい世界が、舞台の上に、浮き出されている事を感じない訳には、行かなかった。ただ浮ついた根も葉もないような傾城買の狂言とは違うて、一歩深く人の心の裡に踏み入った世界が、舞台の上に展開されて来るのを認めない訳には行かなかった。見物は、傾城買の狂言から、たわいもなく七三郎の舞台へ、惹き付けられて行った。が、藤十郎は、見物のたわいもない妄動の裡に、深い尤もな理由のあるのを、看取しない訳には行かなかったのである。

小手先の芸の問題ではなかった。彼は、もっと深い大切なところで、若輩の七三郎に一足取残されようとしたのである。七三郎の巴之丞が、洛中洛外の人気を唆って、弥生狂言をも、同じ芸題で打ち続けると云う噂を聞きながら、藤十郎は烈しい焦躁と不安の胸を抑えて、じっと思案の手を拱ぬいたので

ある。その時に、ふと彼の心に浮んだのは、浪華に住んでいる近松門左衛門の事であった。

四

それは、二月のある宵であった。四条中東の京の端、鴨川の流近く瀬鳴の音が、手に取って聞えるような茶屋宗清の大広間で、万太夫座の弥生狂言の顔つなぎの宴が開かれていた。

広間の中央、床柱を背にして、銀燭の光を真向に浴びながら、どんすの鏡蒲団の上に、悠ったりと坐り、心持脇息に身を靠せているのは、坂田藤十郎であった。茶せんに結った色白の面は、四十を越した男とは、思われぬ程の美しさに輝いて見えた。下には鼠縮緬の引かえしを着、上には黒羽二重の両面芥子人形の加賀紋の羽織を打ちかけ、宗伝唐茶の畳帯をしめていた。藤十郎の右に坐っているのは、一座の若女形の切波千寿であった。白小袖の上に、紫縮緬の二つ重ねを着、虎膚天鵞絨の羽織に、紫の野良帽子をいただいた風情は、さながら女の如く艶めかしい、この二人を囲んで、一座の道化方、くわしゃ方、若衆方などの人々が、それぞれ華美な風俗の限を尽して居並んでいた。その中に、只一人千筋の羽織を着た質素な風俗をした二十五六の男は、万太夫座の若太夫であった。彼は、先刻から酒席の間を、彼方此方と廻って、酒宴の興を取持っていたが、漸く酩酊したらしい顔に満面の微笑を湛えながら、藤十郎の前に改めて畏まると、恐る恐る酒盃を前に出した。

「さあ、もう一つお受け下されませ。今度の弥生狂言は、近松様の趣向で、歌舞伎始まっての珍らしい狂言じゃと、都の中はただこの噂ばかりじゃげにござります。傾城買の所作は日本無双と云われた御身様じゃが、道ならぬ恋のいきかたは、又格別の御思案がござりましょうなハハハハ」と、巧な追従笑いに語尾を濁した。と、藤十郎と居並んでいる切波千寿は、急に美しい微笑を洩しながら、

「ホンに若太夫殿の云う通じゃ。藤十郎様には、その辺の御思案が、もうちゃんと付いている筈じゃ。われなどは、ただ藤十郎様に操られて傀儡のように動けばよいのじゃ」と、合槌を打った。

藤十郎は、若太夫の差した酒盃を、受け取りはしたものの、彼の言葉にも、千寿の言葉にも、一言も返しをしなかった。彼は、酒の味が、急に苦くなったように、心持顔を顰めながら、グット一気にその酒盃を飲み乾したばかりであった。

彼は、今宵の酒宴が、始まって以来、何気ない風に酒盃を重ねてはいたものの、心の裡には、可なり烈しい芸術的な苦悶が、渦巻いているのであった。

彼が、近松門左衛門に、急飛脚を飛ばして、割なく頼んだことは、即座に叶えられたのであった。今までの傾城買とは、裏と表のように、打ち変った狂言として、門左衛門が藤十郎に書与えた狂言は、浮ついた陽気なたわいもない傾城買の濡事とは違うて、命を賭しての色事であった。打ち沈んだ陰気な、懸命な命を捨ててする濡事であった。芸題は『大経師昔暦』と云って、京の人々の、記憶にはまだ新しい室町通の大経師の女房おさんが、手代茂右衛門と不義をして、粟田口に刑死するまでの、呪われた命懸けの恋の狂言であった。

藤十郎の芸に取って、其処に新しい世界が開かれた。がそれと同時に、前代未聞の狂言に対する不安と焦慮とは、自信の強い彼の心にも萌さない訳には行かなかった。

五

藤十郎の心に、そうした屈託があろうとは、夢にも気付かない若太夫は、芝居国の国王たる藤十郎の機嫌を、如何にもして取結ぼうと思ったらしく、

「この狂言に比べましては、七三郎殿の『浅間ヶ嶽』の狂言も童たらしのように、曲ものう見えまするわ。前代未聞の密夫の狂言とは、さすがに門左衛門様の御趣向じゃ。それに付けましても、坂田様にはこうした変った恋のお覚えもござりましょうなハハハハ」と、時にとっての座興のように高々と笑った。

今まで、おし黙っていた藤十郎の堅い唇が、綻びたかと思うと、「左様な事、何のあってよいものか」と、苦りきって吐き出すように云った。「藤十郎は、生れながらの色好みじゃが、まだ人の女房と念頃した覚えはござらぬわ」と、冷めたい苦笑を洩しながら付け加えた。若太夫は、座興の積で云った諧謔を、真向から突き飛ばされて、興ざめ顔に黙ってしまった。

傍に坐っていた切波千寿は、一座が白けるのを恐れたのであろう。取做し顔に、微笑を含みながら、

「ほんに、坂田様の云われる通じゃ。この千寿とても、主ある女房と、念ごろした事はないわいな」と、云いながら女のように美しい口を掩うた。

が、藤十郎は、前よりも一際、苦りきったままであった。彼は今心の裡で、僅か三日の後に迫った初日を控えて、芸の苦心に肝胆を砕いていたのである。彼に取って、其処に可なり危険な試金石が横わっている。『あれ見よ、密夫の狂言とは、名ばかりで相も変らぬ藤十郎じゃ』と、云われては、自分の芸は永久に廃れるのだと、彼は心の裡に、覚悟の臍を堅めていた。ただ、相手の傾城が、人妻に変ったばかりで、昔ながらの藤十郎だとは、夢にも云わせてはならないと、心の裡に思い定めていた。

が、それかと云って、藤十郎は、自分で口に出して云った通、道ならぬ恋をした覚はさらさらなかったのである。元より、歌舞伎役者の常として、色子として舞台を踏んだ十二三の頃から、数多くの色々の色情生活を閲している。四十を越えた今日までには幾十人の女を知ったか分らない。彼の姿絵を、床の下に敷きながら、焦れ死んだ娘や、彼に対する恋の叶わぬ悲しみから、清水の舞台から身を投げた女さえない事はない。が、こうした生活にも拘らず、天性律義な藤十郎は、若い時から、不義非道な色事には、一指をだに染めることをしなかった。そうした誘惑に接する毎に、彼は猛然として、これと戦って来ている。彼が、役者にも似合わず『藤十郎殿は、物堅い御仁じゃ』と、云われて、芝居国の長者として、周囲から、尊敬されているのも、一つにはこうした訳からでもあった。

従って、彼は、過去の経験から、人妻を盗むような必死な、空恐ろしい、それと同時に身を焼くように烈しい恋に近い場

合を、色々と尋ねてみたが、彼のどの恋もどの恋も極めて正当な、物柔かな恋であって、冬の海のように恐ろしい恋や、夏の太陽のような烈しい恋の場合は、どう考えても頭に浮んでは来なかった。

六

傾城買の経緯なれば、どんなに微妙にでも、演じ得ると云う自信を持った藤十郎も、人妻との呪われた悪魔的な、道ならぬ然し懸命な必死の恋を、舞台の上にどう演活してよいかは、ほとほと思案の及ばぬところであった。これまでの歌舞伎狂言と云えば、傾城買のたわいもない戯れか、でなければ物真似の道化に尽きていた為に、こうした密夫の狂言などに、頼れるような前代の名優の仕残した型などは、微塵も残っていなかった。それかと云って、彼はこうした場合に、打ち明けて智慧を借るべき、相談相手を持っていなかった。彼の茂右衛門に、おさんを勤める切波千寿は、天性の美貌一つが、彼の舞台の凡てであった。ただ、藤十郎の指図のままに、傀儡のごとく動くのが、彼の演伎の凡てであったのだ。

藤十郎は、自分自身の肝脳を搾るより外には、工夫の仕方もなかったのである。

藤十郎の不機嫌の背後に、そうした根本的な屈託が、潜んでいるとは気のつかない一座の人々は、白け始めようとする酒宴の座を、どうかして引き立たせようと、思ったのだろう、五十に手の届きそうな道化方の老優は、傍に坐っていた二十を出たばかりの、野良帽子を着た美しい若衆方を促し立てながら、おどけた連舞を舞い始めた。

藤十郎は、二人の舞を振向きもしないで、日頃には似ず、大杯を重ねて四度ばかり、したたかに飲み乾すと、俄に発して来た酔に、座には得堪えられぬように、つと席を立ちながら、河原に臨んだ広い縁に出た。

河原の闇の底を流れる川水が、ほのかな光を放っている外は、晦日に近い夜の空は曇って、星一つさえ見えなかった。声ばかり飛び交うているかのように、闇のなかに千鳥が、ちちと鳴きしきっていた。

歌舞伎の長者として、王者のように誇を、持っていた藤十郎の心も、蹴合せに負けた鶏のように悄気きってしまっていた。彼が、座を立った為に、上からの圧迫の取れたように、急にはずみかけた酒宴の席のさわがしいどよめきを、後にしながら、彼は知らず知らず静寂な場所を求めて、勝手を知った宗清の部屋々々を通り抜けながら、奥の離座敷を志した。

母屋からは一段と、河原の中に突出ている離座敷には、人の気勢もなかった。ただほんのりと灯っている、絹行燈の光の裡に、美しい調度などが、春の夜に適しい艶めいた静けさを保っていた。藤十郎は、人影の見えぬのを心の中に欣んだ。彼は、床の間に置いてあった脇息を、取り下すと、それに右の肱を靠せながら、身を横ざまに伸したのである。

が、騒々しい酒宴の席から、身を脱れた欣びは、直ぐ消えてしまって、芸の苦心が再びひしひしと胸に迫って来る。明日からは稽古が始まる。肝腎要の茂右衛門の行き方が、定らいでは相手のおさんも、その他の人々もどう動いてよいか、思案の仕様もないことになる。己が工夫が拙うては、近松門

左が心を砕いた前代未聞の狂言も、あたら京童の笑い草にならぬとも限らない。こう思いながら、藤十郎は胸の中に渦巻いている、もどかしさを抑えながら、一途に心をその方へ振り向けようとあせった。

その時である。母屋の方から、とんとんと離座敷を指して来る人の足音が、聞えて来た。

七

折角、さわがしい酒席を逃れて、求め得た静かな場所で、芸の苦心を凝らそうと思っていた藤十郎は、自分の方へ近づいて来る人の足音を聞いて、心持眉を顰めぬ訳には行かなかった。

が、近づいて来る足音の主は、此処に藤十郎が居ようなどとは、夢にも気付かないらしく、足早に長い廊下を通り抜けて、この部屋に近づくままに、女性らしい衣ずれの音をさせたかと思うと、会釈もなく部屋の障子を押し開いた。が、其処に横たわっていた藤十郎の姿を見ると、吃驚して敷居際に立ち竦んでしまった。

「あれ、藤様はここにおわしたのか。これはこれはいかい粗相を」と、云いながら、女は直ぐ障子を閉ざして、去ろうとしたが、又立ち直って、「ほんに、このように冷える処で、そうして御座って、御風邪など召すとわるい。どれ、私が夜のものをかけて進ぜましょう」と、云いながら、部屋の片隅の押入から、夜具を取り下ろそうとしている。

藤十郎は、最初足音を聞いた時、召使の者であろうと思ったので、彼は寝そべったまま、起き直ろうとはしなかった。が、それが意外にも、宗清の主人宗山清兵衛の女房お梶であると知ると、彼は起き上って、一寸居ずまいを正しながら、「いやこれは、いかい御雑作じゃのう」と、会釈をした。

お梶は、もう四十に近かったが、宮川町の歌妓として、若い頃に嬌名を謳われた面影が、そっくりと白い細面の顔に、ありありと残っている。浅黄紈の引かえしに折びろうどの帯をしめ、薄色の絹足袋をはいた年増姿は、又なく艶に美しかった。藤十郎は、昔から、お梶を知っている。若衆方の随一の美形と云われた藤十郎が美しいか、歌妓のお梶が美しいかと云う物争いは、二十年の昔には、四条の茶屋に遊ぶ大尽達の口に上った事さえある。その頃からの馴染である。が、藤十郎は、今までに、お梶の姿を心にとめて、見たこともない。ただ路傍の花に対するような、淡々たる一瞥を与えていたに過ぎなかった。

が、今宵は、この人妻の姿が、云い知れぬ魅力を以て、ぐんぐんと彼の眼の中に、迫って来るのを覚えた。密夫と云う彼にとっては、未だ踏んでみた事のない恋の領域の事を、この四五日、一心に思い詰めていた為だろう。今までは余り彼の念頭になかった人妻と云う女性の特別な種類が、彼の心に不思議な魅力を持ち始めて、今お梶の姿となって、ぐんぐん迫って来るように覚えた。

藤十郎のお梶を見詰める眸が、異常な興奮で、燃え始めたのは無論である。人妻であると云う道徳的な柵が取払れて、その古木が却って、彼の慾情を培う、薪木として投ぜられたようである。彼は、娘や後家や歌妓や遊女などに、相対した

時には、かつふつ懐いた事のないような、不思議な物狂わしい情熱が、彼の心と身体とを、沸々燃やし始めたのである。

八

藤十郎の心にそうした、物狂わしい颼風が起っていようとは、夢にも気付かないらしいお梶は押入れから白絣の夜着を取出すと、藤十郎の背後に廻りながら、ふうわりと着せかけた。

白鳥の胸毛か何かのように、暖い柔かい、夜着の感触を身体一面に味った時、藤十郎のお梶に対する異常な興奮は、危く爆発しようとした。が、彼の律義な人格は、咄嗟に彼の慾情の妄動をきっぱりと、制し得たのである。藤十郎は、宗山清兵衛の事を考えた。また、貞淑と云う噂の高いお梶の事を考えた。そして自分が、今まで色事をしながらも、正しい道を踏み外さなかったと云う自分自身の誇を考えた。彼のお梶に対して懐いた嵐のような激動は、忽ち和ぎ始めたのである。

お梶は、平素の通のお梶であった。彼女は夜着を着せてしまうと「さあ、お休みなされませ。彼方へ行ったら女どもに、水など運ばせましょうわいな」と、愛想笑いを残して足早に部屋を出ようとした。その刹那である。藤十郎の心にある悪魔的な思付がムラムラと湧いて来た。それは恋ではなかった。それは烈しい慾情ではなかった。それは、恐ろしいほど冷めたい理性の思付であった。恋の場合には可なり臆病であった藤十郎は、あたかも別人のように、先刻の興奮は、丸きり嘘であったかのように、冷静に、

「お梶どの、ちと待たせられい」と、呼び止めた。

「何ぞ、外に御用があってか」と、お梶は無邪気に、振り返った。剃り落とした眉毛の後が青々と浮んで見える色白の美顔は、絹行燈の灯影を浴びて、ほんのりと艶めかしかった。

「ちと、御意を得たいことがある程に、坐ってたもらぬか」こう云いながら、藤十郎は、心持ち女の方へ膝をすすませた。

お梶は、藤十郎の息込み方に、少し不安を、感じたのであろう。藤十郎には、余り近寄らないで、其処に置いてある絹行燈の蔭に、踞まるように坐った。

「改まって何の用ぞいのうおほほほ」と、何気なく笑いながらも、稍面映ゆげに藤十郎の顔を打ち仰いだ。藤十郎の声音は、今までとは打って変って、低いけれども、然しながら力強い響を持っていた。

「お梶どの。別儀ではござらぬが、この藤十郎は、そなたに二十年来隠していた事がある。それを今宵は是非にも、聴いて貰いたいのじゃ。思い出せば、古いことじゃが、そなたが十六で、われらが二十の秋じゃったが、祇園祭の折に、河原の掛小屋で二人一緒に、連舞を舞うたことを、よもや忘れはしやるまいなあ。われらが、そなたを見たのは、あの時が初めてじゃ。宮川町のお梶どのと云えば、いかに美しい若女形でも、足下にも及ぶまいと、兼々人の噂に聴いていたが、そなたの美しさがよもあれ程であろうとは、夢にも思い及ばなかったのじゃ」と、こう云いながら、藤十郎はその大きい眼を半眼に閉じながら、美しかった青春の夢を、うっとりと追うているような眼付をするのであった。

九

「その時からじゃ。そなたを、世にも稀な美しい人じゃと、思い染めたのは」と、藤十郎は、お梶の方へ双膝を進ませながら、必死の色を眸に浮べて、こう云いきった。

藤十郎に呼び止められた時から、ある不安な期待に、胸をとどろかせていたお梶は最初はこの美しい男の口から、自分達の華やかな青春の日の、想出話を聴かされて、魅せられたように、ほのぼのと二つの頬を薄紅に染めていたが、相手の言葉が、急な転回を示してからは、その顔の色は刹那に蒼ざめて、蹲くまっている華奢な身体は、わなわなと戦き始めていた。

藤十郎は、恋をする男とは、どうしても受取れぬ程の、澄んだ冷たい眼付で、顔さえ擡げ得ぬ女を刺し透す程に、鋭く見詰めていながら、声だけには、烈しい熱情に顫えているような響を持たせて、

「そなたを見染めた当座は、折があらば云い寄ろうと、始終念じてはいたものの、若衆方の身は親方の掟が厳しゅうて、寸時も心には委せぬ身体じゃ。ただ心は、焼くように思い焦れても、所詮は機を待つより外はないと、諦めている内に、二十の声を聞くや聞かずに、そなたは清兵衛殿の思われ人となってしまわれた。その折のわれらが無念は、今思い出しても、この胸が張り裂くるようでおじゃるわ」こう云いながら、藤十郎は座にもえ堪えぬような、巧みな身悶えをして見せたが、そうした恋を語りながらも、彼の二つの眸だけは、相変らず爛々たる冷たい光を放って、女の息づかいから容子までを、恐ろしきまでに見詰めている。

お梶の顔の色は、彼女の心の恐ろしい激動をさながらに、映し出していた。一旦蒼ざめきってしまった色が、反動的に段々薄赤くなると共に、その二つの眼には、熱病患者に見るような、直にも火が点きそうな凄じい色を湛え始めた。

「人妻になったそなたを恋い慕うのは人間のする事ではないと、心で強う制統しても、止まらぬは凡夫の想じゃ。そなたの噂を聴くにつけ、面影を見るにつけ、二十年のその間、そなたの事を忘れた日は、ただ一日もおじゃらぬわ」彼は、一語一語に、一句一句に巧な、今までの彼の舞台上の凡ての演戯にも、打ち勝った程の仕打を見せながら、しかも人妻をかき口説く、恐怖と不安とを交えながら、小鳥のように竦んでいる女の方へ、詰め寄せるのであった。

「が、この藤十郎も、人妻に恋をしかけるような非道な事は、なすまじいと、明暮燃え熾る心をじっと抑えて来たのじゃが、われらも今年四十五じゃ、人間の定命はもう近い。これ程の恋を――二十年来偲びに偲んだこれ程の想を、この世で一言も打ち明けいで、何時の世誰にか語るべきと、思うに付けても、物狂わしゅうなるまでに、心が擾れ申して、かくの有様じゃ。のう、お梶どの、藤十郎をあわれと思召さば、たった一言情ある言葉を、なあ……」と、藤十郎は狂うばかりに身悶えしながら、女の近くへ身をすり寄せている。ただ恋に狂うている筈の、彼の瞳ばかりは、刃のように澄みきっていた。

余りの激動に堪えかねたのであろう、お梶は、

「わっ」と、泣き俯してしまった。

十

恐ろしい魔女が、その魅力の犠牲者を、見詰めるように、藤十郎は泣き俯したお梶を、じっと見詰めていた。彼の唇の辺には、凄じい程の冷たい表情が浮んでいた。が、それにも拘らず、声と動作とは、恋に狂うた男に適しい熱情を、持っている。

「のう、お梶どの。そなたは、この藤十郎の恋を、あわれとは思さぬか。二十年来、堪え忍んで来た恋を、あわれとは思さぬか。さても、強いお人じゃのう」こう云いながら、藤十郎は、相手の返事を待った。が、女はよよと、すすり泣いているばかりであった。

灯を慕って来た千鳥だろう。銀の鋏を使うような澄んだ声が、瀬音にも紛れず、手に取るように聞えて来る。女も藤十郎も、おし黙ったまま、暫くは時刻が移った。

「藤十郎の切ない恋を、情なくするとは、さても気強いお人じゃのう、舞台の上の色事では日本無双の藤十郎も、そなたにかかっては、たわいものう振られ申したわ」と藤十郎は、淋しげな苦笑を洩した。

と、今まで泣き俯していた女は、ふと面を上げた。

「藤様、今仰った事は、皆本心かいな」

女の声は、消え入るようであった。その唇が微かに痙攣した。

「何の、てんごうを云うてなるものか、人妻に云い寄るからは、命を投げ出しての恋じゃ」と、いうかと思うと、藤十郎の顔も、さっと蒼白に変じてしまった。浮腰になっている彼の膝が、かすかに顫いを帯び始めた。

必死の覚悟を定めたらしいお梶は、火のような瞳で、男の顔を一目見ると、いきなり傍の絹行燈の灯を、フッと吹き消してしまった。

恐ろしい沈黙が、其処にあった。

お梶は、身体中の毛髪が悉く逆立つような恐ろしさと、身体中の血潮が悉く湧き立つような情熱とで、男の近寄るのを待っていた。が、男の苦しそうな息遣いが、聞えるばかりで、相手は身動きもしないようであった。お梶も居竦んだまま、身体をわなわなと顫わせているばかりであった。

突如、藤十郎の立ち上る気勢がした。お梶は、今こそと覚悟を定めていた。が、男はお梶の傍を、影のようにすりぬけると、灯のない闇を、手探りに廊下へ出たかと思うと、母屋の灯影を目的に獣のように、足速く走り去ってしまったのである。

×

闇の中に取残されたお梶は、人間の女性が受けた最も皮肉な残酷な辱しめを受けて、闇の中に石のように、突立っていた。

悪戯としては、命取りの悪戯であった。侮辱としては、この世に二つとはあるまじい侮辱であった。が、お梶は、藤十郎からこれ程の悪戯や侮辱を受くる理由を、どうしても考え出せないのに苦しんだ。それと共に、この恐ろしい誘惑の為に、自分の操を捨てようとした——否、殆ど捨ててしまった

罪の恐ろしさに、彼女は腸をずたずたに切られるようであった。

十一

酒宴の席に帰った藤十郎は、人間の面とは思えないほどの、凄じい顔をしていた。が、彼は、勧められるままに大盃を五つ六つばかり飲み乾すと、血走った眼に、切波千寿の方を向きながら、

「千寿どの安堵めされい。藤十郎、この度の狂言の工夫が悉く成り申したわ」と云いながら、声高に笑って見せた。が、その声は、地獄の亡者の笑い声のようにしわがれた空っぽな、気味の悪い声であった。

×

弥生朔日から、万太夫座では愈々近松門左が書き下しの狂言の蓋が開かれた。藤十郎の茂右衛門と切波千寿のおさんとの密夫の狂言は、恐ろしきまで真に迫って、洛中洛外の評判かまびすしく、正月から打ち続けて勝ち誇っていた山下座の中村七三郎の評判も、月の前の螢火のように、見る影もなく消されてしまった。

が、この興行の評判に連れて、京童の口にこうした挿話が伝えられた。それは、『藤十郎殿は、この度の狂言の工夫には、ある茶屋の女房に偽って恋をしかけ、女が靡いて灯を吹き消す時、急いで逃れたとの事じゃが、さすがは三国一の名人の心掛だけある』と云う噂であった。

『偽にもせよ、藤十郎殿から恋をしかけられた女房も、三国一の果報者じゃ』と、艶めいた京の女達は、こう云い添えた。

こうした噂までが、愈が上に、この狂言の人気を唆った。

来る日も、来る日も、潮のような見物が明け方から万太夫座の周囲に渦を巻いていた。

弥生の半ばであったろう。或朝、万太夫座の道具方が、楽屋の片隅の梁に、縊れて死んだ中年の女を見出した。それは、紛れもなく宗清の女房お梶であった。お梶は、宗清とは屋続きの万太夫座に忍び入って、其処を最期の死場所と定めたのである。その死因に就ても、京童は色々に、口性ない噂を立てた。が誰人も藤十郎の偽りの恋の相手が、貞淑の聞え高いお梶だとは思いも及ばなかった。

ただ、お梶の死を聴いた藤十郎は、雷に打たれたように色を易えた。が彼は心の中で、

『藤十郎の芸の為には、一人や二人の女の命は』と、幾度も力強く繰り返した。が、そう繰り返してみたものの、彼の心に出来た目に見えぬ深手は、折にふれ、時にふれ彼を苛まずにはいなかった。

お梶が、楽屋で縊れた事までが、万太夫座の人気を培った。

お梶が、死んで以来、藤十郎の茂右衛門の芸は、愈々冴えて行った。彼の瞳は、人妻を奪う罪深い男の苦悩を、ありありと刻んでいた。彼がおさんと暗闇で手を引き合う時、密夫の恐怖と不安と、罪の怖しさとが、身体一杯に溢れていた。

其処には、藤十郎が茂右衛門か、茂右衛門が藤十郎か、何の差別もないようであった。恐らく藤十郎自身、人の女房に云い寄る恐ろしさを、肝に銘じていた為であろう。